

展示記録

特集陳列「倣古—中国古銅器から生まれた陶磁器」

田畑 潤

(愛知県陶磁美術館 学芸員)

はじめに

愛知県陶磁美術館の常設展の特集陳列「倣古—中国古銅器から生まれた陶磁器」において、「倣古¹⁾」をテーマにした中国陶磁を紹介した。「倣古」の意味は文字通り古に倣うことを指すが、三代(夏殷周)から秦漢時代の青銅器に倣った器物を主にいう。素材は青銅器をはじめ、陶磁器や玉器などにも広がり、その多くは本来の用途の範疇を越え、仏具や文房飾りなどに供される。北宋時代の徽宗皇帝や士大夫階級が、中国古代の青銅器に新たな価値観を見出し、復古運動が最盛期を迎え、多くの「倣古」器物が制作された。「倣古」のもととなる中国古代の青銅器は、士大夫階級、文人のステータスシンボルになり、明時代の最盛期とされる五代宣徳帝や、清時代の六代乾隆帝も「倣古」を推し進めた皇帝として知られる。本展では、はるか古代に行われた「倣」青銅器の原始青磁から、時代を超えた「倣古」青銅器の陶磁器を取り上げ、館蔵品の中から「鼎」、「尊」、「觚」、「鬲」について、デザインの元となった青銅器の意味とともに紹介したものである。

鼎

鼎については以前、出現と展開、関連する伝承とその役割、そして煎茶席における意味について取り上げた²⁾。鼎の文字とその用途について補足をすると、殷代甲骨文字や金文の「鼎」字は、両耳のついた鍋に足が付く器を真横からみた形であり、そこから現在の漢字へと変化していったことがわかる(図1)。用途については、南北朝時代の梁(6世紀前半)の顧野王が編んだ漢字辞典『玉篇』に、「鼎、食を熟する所以の器なり」とあり、出土品の鼎の脚部や底部に火にかけた痕跡もみられることから、肉や魚を煮込んで羹(スープ)を作る器と考えられており、甲骨文字や金文の鼎の脚部は火がかかったような表現とも見て取れる。古代において容易に動かさない巨大な鼎が造られていることから、宗廟等で定められた位置に置き、本体を動かさずに用いることが基本であり、「鼎=王朝」が不動であることを示

すことに意義があると考えられる。幕末から明治、大正時代の茗謙図録から、煎茶席及び付随する席において、古代とその写しを含む青銅器や陶磁器、木漆器の鼎が、香炉あるいは火炉・瓶掛として使用されていることがわかる。鼎は席中、当然のことながら不動の位置に据えてあるが、器の出し入れや移動の際に、軽々しく扱うことは避けるべきである。



図1：「鼎」字（左から、甲骨文・金文・小篆・楷書）

「倣古」の鼎として、以前も紹介した原始青磁有蓋鼎を取り上げた³（図2）。蓋を含めた総高19.0cm、口径20.5cmのこの鼎は、戦国時代前期から中期（紀元前5—紀元前3世紀頃）の青銅器（図3）を模した鼎であり、あくまで同時代の鼎に倣ったもので「倣古」の概念とは異なる。中国古代の青銅器は銅と錫の合金で、錫の配分比率から制作時は黄金に近い色を呈していたことから、この種の原始青磁の色合いも青銅器に倣ったものと考えられる。



図2：原始青磁有蓋鼎
（愛知県陶磁美術館 小川徳男氏寄贈）



図3：弦文鼎 戦国時代
（台北故宮博物院）

尊⁴

「尊」とは、『説文解字』酋部に「酒器なり。酋に従う。卩は以って之を奉じる。『周禮』六尊に、犧尊、象尊、著尊、壺尊、大尊、山尊あり。以て祭祀賓客の禮を待つ。」とある。酒器の総称として尊と呼ばれ、字形の「酋」は酒気が酒器の上にあらわれている形で「卩」を両手で物を捧げる形をあらわしている（図4）。中国古代夏殷周時代の礼制をまとめた書の一つ『周禮』に六つの尊の記述がみられる。牛・羊・犬等を示す犧尊、鳥獸・象・犀等を示す象尊、ラップパロの器を示す著尊、壺型の器を示す壺尊、甕型の器を示す大尊、大型の器を示す山尊が挙げられており、これらはみな祭祀と賓客の用に供するものである、と記され

ている。殷周時代の青銅器の中で固有名称としての「尊」の自銘はみられず、礼器・酒器の総称として「尊」銘が用いられ、「○○作尊彝（○○が作った青銅禮器）」という文言で記される。北宋時代、徽宗皇帝の宣和年間に成書された『博古図録』から、現在「尊」と呼ばれている器と名称が符号するようになる。現在においても「尊」は酒器の総称としての意味を残しており、『周禮』六尊に挙げられているような様々な形状の器、鳥獸形の酒器も「尊」と呼ばれることとなった。



図4：「尊」字（左から、甲骨文・金文・小篆・楷書）

「倣古」の尊として、愛知県陶磁美術館所蔵の青花饕餮文尊を紹介した（図5）。高さ24.7cm、最大径は口縁部で12.1cmを呈するこの尊は、ラップ口の口縁と直線的長くに立ち上がる頸部、やや丸く張り出した胴部、下部に広がる圈足を持っている。頸部と圈足部には蕉葉文が、胴部には饕餮文が青花（染付）で施文されている。清時代後期の景德鎮窯の作とされ、中国黄河中流域の殷周青銅器を祖形にしているが（図6）、饕餮文は清時代にアレンジされたデザインになっている。



図5：青花饕餮文尊

（愛知県陶磁美術館 中島達夫氏寄贈）



図6：父辛尊 西周初期

（台北故宫博物院）

「倣古」のもととなる殷周青銅器の尊をはじめ、青花や青磁、五彩など存在感のある尊は、煎茶席及び付随する席において花器として使用されていることが、幕末から明治、大正時代の茗讌図録から読み取れる。1875（明治8）年11月、東山山麓の円山において京都鳩居堂の熊谷直孝（酔香）の追善のための煎茶会を記した『円山勝会図録』の「右茗席設於牡丹圃之別亭」の本席では、紫檀の座に載せられた青銅尊に枇杷が生けられ、また他方には瓶掛と

して青銅鼎が用いられている（図7）。

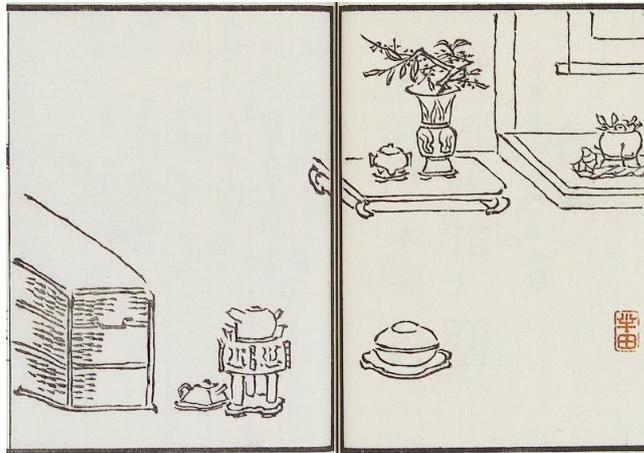


図7：『円山勝会図録』右茗席設於牡丹圃之別亭 本席

觚⁵

煎茶席に飾られる花器の中に「倣古」の器がみられるが、その元となる殷周時代の青銅器の多くは酒器であり、「觚」もその一つである。「觚」とは、『説文解字』角部に「郷飲酒の爵なり。一に曰く觶三升を受くる者、これを觚と謂う。」とあり、郷飲酒の礼⁶に用いる杯で、三升の容量のものを觚という、とある。中国古代夏殷周時代の礼制をまとめた書の『周禮』冬官考工記に「梓人。飲器を為る。勺は一升、爵は一升、觚は三升、獻ずるに爵を以てし、酬するに觚を以てす。」とあり、梓人とは飲酒器を製作する職人で、勺の容量は一升、爵は一升、觚は三升、爵は献酒に、觚は（返礼の）酬酒に用いる、とある。また、同書は前漢時代の韓嬰（生没年不詳）の『韓詩外傳』を引き「一升を爵といい、二升を觚といい、三升を觶といい、四升を角といい、五升を散という。」ともあり、『論語集解』の中では後漢時代の馬融（79-116）の「觚は禮器なり。一升を爵といい、二升を觚という。」の説を引用している。漢代の一升は約200mlとされることから400~600ml程度の容量を持つものを「觚」とする認識があったと思われる。

『論語』雍也に「子曰く、觚、觚ならず。觚ならんや、觚ならんや」という抽象的で漠然とした文言がみられる。觚が觚でなくなった、ということで、觚の形状または容量が変わってしまったことを示す言葉と考えられる。前述の容量で言うと、古来「觚」は少量の酒を飲む杯であったが、孔子の時代には大酒を飲むために大型化してしまい、本来の儀礼の杯ではなくなってしまった、つまりは時代の変化とともにモノの本質が変化してしまうことへの嘆きを表した言葉とも理解出来る一節である。

殷周青銅器の觚は、ラッパ形の口縁に細長い胴部と末広りの圈足を持つ飲酒用の杯とされる（図10）。「尊」と良く似た形状であるが、貯蔵用の「尊」に比べて小さく細く、高さは20～30cm程度であり、片手で扱える器となっている。「觚」は殷周時代の貴族の墓から、三足の「爵」という温酒器とセットになって出土し、その数量も多いことから、飲酒用の器と捉えられている。殷代甲骨文には「觚」の字はみられず（図8）、殷周青銅器の「觚」自体に「觚」と銘記するものは存在しない。この種の器を「觚」と命名したのは宋時代以降であり、殷周時代当時何と呼ばれていたかは不明である。また、殷周青銅器の「觚」は、殷代中期から西周時代中期まで製作された後は姿を消すが、宋時代の倣古により再び姿を現す器となり、文房飾りや花器として絵画に登場する。また、明清時代には「花觚」と呼ばれていたことが知られる。

觚 觚 觚

図8：「觚」字（左から、金文・小篆・楷書）

「倣古」の觚として、愛知県陶磁美術館所蔵の釉裏紅龍文觚形瓶を紹介した（図9）。高さ40.5cm、口径24.0cm、底径16.5cmのこの器は清時代の景德鎮窯の作で、ラッパ形に大きく広がる口縁と細長く伸びる頸部を呈し、鼓腹形の胴部と釣り鐘形の圈足を持ち、中央の胴上部分で上下に分かれる構造になっている。高さが40cmを超える大型の器であり、殷周青銅器の「觚」には分割されるものはみられないが、その形状から「觚」形とされている。孔子が「觚ならんや」と嘆いた「觚」は、このような規格外の大きさであったかもしれない。頸部と圈足部には五爪の龍が紅く画かれている。龍は天空の雷や海・河の水神を象徴し、雲文や雷文、波濤文とともに画かれることが多い。龍は権力者としての皇帝のシンボルとなり、中でも「五爪二角」の龍文は、元時代の延祐2年（1315）に皇帝専用の文様として厳しく規定され、以降明清時代においても皇帝権力の象徴として用いられた。朝鮮や東南アジアの周辺諸国の龍は、五爪の龍文は使用できず、爪を減らした四爪、三爪の龍を基礎としていたことは有名である。釉裏紅は青花（染付）と同じ技法で、銅顔料で絵付けし、上から透明釉を掛けた後、還元焰により紅く発色したものであり、高度な技術が要求される。



図 9：釉裏紅龍文觚形瓶
(愛知県陶磁美術館)



図 10：初父丁觚 西周時代
(台北故宮博物院)

鬲⁷

「鬲」とは、『説文解字』鬲部に「鼎の屬なり。五穀を實る。斗二升を穀と曰う。腹の交文と三足に象る。」とある。鼎に似て穀類の煮沸に用いたとされ、交差形（広がる口縁から内側に窄まる頸部、そして膨らむ胴部という両側X形）の胴部と、袋状の三本足を持つ器と記されている。また、古語を種目別に分類、解説した最古の辞書とされる『爾雅』（著者・成立年未詳、紀元前 2 世紀頃にはあったとされる。）釋器に「款足のもの、これを鬲と謂う。」とあり、款足、つまりは中が空洞の足、空足のものを「鬲」としている。「鼎」と「鬲」はよく似た器であり、ともに器を真横からみた形からきた字形であるが（図 11）、足の構造や作り方が異なる。「鼎」は胴部と足部に明確な境があり、柱状の足であるのに対し、「鬲」は胴部と足部に明確な境が無く続いており、中空のものが主流である。「鼎」が足を後付けするのに対し、「鬲」は型で作った中空の三本足を合わせて底を作る方法や、筒状の粘土を内側に折り曲げて三本足を形作る方法などがとられる（図 12）。また、「鼎」は肉や魚を煮るために、単独でしか用いられないのに対し、「鬲」は水を入れて穀物を煮たり、上に甑をのせて蒸したりしたとも推測される。



図 11：「鬲」字（左から、甲骨文・金文・小篆・楷書）

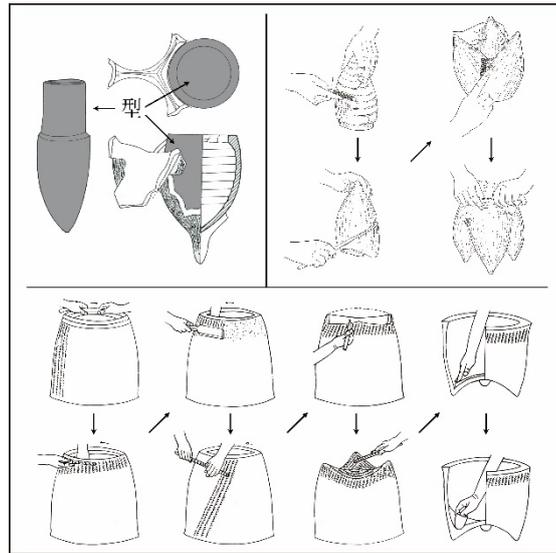


図 12：鬲足の作り方

李文傑 1996『中国古代制陶工藝研究』科学出版社より筆者作成

中国新石器時代には土製の「鼎」や「鬲」は日常の煮沸具として出現しており、殷周時代の主要な生活容器として捉えられている。愛知県陶磁美術館所蔵の灰陶鬲は、西周時代後期（紀元前 9—紀元前 8 世紀）の黄河中流域で見られる典型的な鬲で、高さは 10cm、口径は 14cm を呈する（図 13）。灰色がかった土製の鬲で、外側に広がる口縁と窄まる頸部、やや膨らむ胴部から三足が続いており、内側をみると三足部分が中空に浅く凹んでいる。殷時代前期には青銅製の鬲が出現するが、土器の鬲とは少し異なり、口縁部に二つの立耳がみられ、深い胴部を持ち、三足の空足部（凹み）も深いものであった。西周時代になると、この灰陶鬲のように両耳が無く浅い空足の鬲が青銅鬲の主流なものとして展開していく（図 14）。



図 13：灰陶鬲

（愛知県陶磁美術館 三浦豊子氏寄贈）



図 14：晋侯鬲二 西周後期

（台北故宫博物院）

「倣古」の「鬲」として、愛知県陶磁美術館所蔵の鉄絵波濤文鬲形香炉を紹介した(図15)。南宋時代から元時代(13-14世紀)の江西省吉州窯の作で、高さは6cm、口径は9cmを呈する。古代の土器や西周時代の青銅器に倣った小型の鬲で、口縁上部には渦状の線文が、胴部には波濤文や宝珠のような文様が鉄絵で描かれ、口縁内部や頸下部と足部が黒く塗られている。中国では漢代から唐代にかけて「博山炉」と呼ばれる山形の蓋の付く高坏形の器が香炉の主流であったが、宋時代の復古運動の中で、殷周青銅器の「鼎」や「鬲」を写した形態へ変化していく。特に中国でいう「鬲形香炉」が、日本では袴を付けた腰付に似ていることから「袴腰香炉」と呼ばれ親しまれている。「袴腰香炉」は、南宋時代から元時代の龍泉窯青磁が有名で、青磁香炉の形状の一種としての名称ともされ、武家や茶の湯の飾りとして数多くの作品が輸入・伝世している。本作は、南宋時代に白磁・青磁のほか黒釉、褐釉、緑釉、白地鉄絵など多彩な技法を用いた吉州窯のもので、玳皮蓋や木葉天目などを生産した窯として知られている。吉州窯の白地鉄絵は、やや灰色がかった素地の上に鉄顔料で文様を描き、透明釉を掛けてから高温で焼き上げているのが特徴である。この種の「鬲形香炉」(「袴腰香炉」)は、茶の湯、煎茶ともに席飾りとして香炉に用いられ、青銅製のほか青磁のものがよくみられ、その他に陶磁・玉製のものもみられる。



図15：鉄絵波濤文鬲形香炉
(愛知県陶磁美術館 西垣千代子氏寄贈)

以上、少例ではあるが、館蔵品の中から「倣古」の陶磁器を元となる殷周青銅器とともに紹介した。陶磁器の器種名の中には殷周青銅器にその字源を持つものが多く、また、これら「倣古」の器は茶席に登場することも多い。中国古代に思いを馳せ、関連する古典を読み解くことで、さらなる理解につながっていくことであろう。



図 16：特集陳列「倣古—中国古銅器から生まれた陶磁器」展示風景

- 1 田畑潤 2016「煎茶—中国古銅器と日本・中国の文人文化—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要 21』愛知県陶磁美術館
- 2 田畑潤 2017「煎茶—鼎—」『愛知県陶磁美術館 研究紀要 22』愛知県陶磁美術館
田畑潤 2020「「文人趣味」にみる倣古—鼎—」『煎茶道』4月号(第752号)一般社団法人 全日本煎茶道連盟
- 3 同註 1、原始青磁については、田畑潤 2018「安徽屯溪土墩墓出土の青銅尊と原始青磁尊について」『愛知県陶磁美術館 研究紀要 23』愛知県陶磁美術館
- 4 田畑潤 2020「「文人趣味」にみる倣古—尊—」『煎茶道』5月号(第753号)一般社団法人 全日本煎茶道連盟
- 5 田畑潤 2020「「文人趣味」にみる倣古—觚—」『煎茶道』6月号(第754号)一般社団法人 全日本煎茶道連盟
- 6 飲酒によって年功序列を示す儀礼を指す。（『禮記』射儀「郷飲酒の礼は、長幼の序を明らかにする所以なり。」）
- 7 田畑潤 2020「「文人趣味」にみる倣古—鬲—」『煎茶道』7月号(第755号)一般社団法人 全日本煎茶道連盟